



# トリノ王立歌劇場 オペラ・ニュース

音楽監督・指揮: ジャンドレア・ノセダ トリノ王立歌劇場管弦楽団&合唱団

## 公演迫る!! デセイの《椿姫》&フリットリの《ラ・ボエーム》

©Ken Howard

ヴェルディ 全3幕  
Giuseppe Verdi LA TRAVIATA

# 椿姫

ヴィオレッタ: ナタリー・デセイ  
アルフレード: マシュー・ポレンザーニ  
ジェルモン: ローラン・ナウリ

### 人生の岐路となった、ヴィオレッタ役歌う女優、ナタリー・デセイの挑戦

小林伸太郎 (音楽ジャーナリスト、在N.Y.)

ナタリー・デセイはアーティストとして自身のことを、「歌手」ではなく「歌う女優」と定義するのだそうだ。数年前のメトロポリタン・オペラのシーズン・オープニング、「ランメルモールのルチア」で大成功を収めた直後のインタビューで語っていた言葉だが、演技が出来ないと評されるより、声が無いと言われる方がましと思うくらい、彼女にとって演ずるということは、大切なことなのだと言う。そんな彼女の表現は、安全なところに留まらないうち、いつも極めて鮮烈なものだ。社会の不条理から逃れるために狂乱に陥る、ルチアのような悲劇のヒロインにしても然り。「連隊の娘」のような、明るいエネルギー溢れるコメディエヌのための役にしても然り。その共感に溢れた自在な表現は、いつもキャラクターの深淵を覗かせるリアルさに満ちている。そこには、複雑なパッセージを難しいと感じさせない堅固なテクニックがあることも、見逃せない。



©VARGIN CLASSICS

そんな歌う女優、デセイにとって、「椿姫」のヒロイン・ヴィオレッタは、演じるのを長年待ち続けた大役であったのだという。「20歳で歌い始めたときには、いつかこの役を歌えるようになるとは思いません

の感情の表現が難しいのです。歌唱の流れを決して崩さずに、可能な限り深い表現をしなければなりません。それが、自分へのチャレンジなのです。」

果たして昨年、米国のサンタフェ・オペラで初演されたローラン・ベリ演出による「椿姫」は、赤毛の髪にピンクのドレスに身を包んだデセイが嬌声を上げながら登場、瞬く間に観客は彼女の世界に引き込まれるものとなった。「私たちは、パーティーを開き、お金のために男と寝て、裕福さを追いかけて、人生を享受している、そういう人間を初めて描こうとしたのです。それが「椿姫」の真のストーリーです。ヴィオレッタの一番の問題だからです。これが原因で、彼女はアルフレードと結婚できないのです。でもヴィオレッタは、汚れた仕事にありますが、純粋な人です。内面には素晴らしい人格を備えているのです。」

ヴェルディ作品というと、「リゴレット」のジルタをすすめられることもあるようですが、今のところ歌うつもりは無いようだ。「実際のところ、ヴィオレッタだけが本当



の「女性」の役です。他の(ヴェルディ作品の)女性達は、世の中から取り残された若い女性だったりでしょう。私の年齢にあった、興味深い役はありません。本当の女性の役だったら演じたいのですが、あいにく、私の声に合う役は、ほとんど無いんですよ。それだけに、盟友ベリ演出による今回の「椿姫」に対する彼女の思いは、熱いものがあるようだ。「(今回の演出は)自然主義的なリアリティではなく、内面の感情を描いたものです。時代設定がどうかとか、歴史を再構築しようとかいうことよりも、人間同士の関係性に重点が置かれていま

す。グラマスでありながら、同時に残酷です。何故なら人生は残酷だからです。とくにヴィオレッタのような女性にとっては。」  
本当は怖かったが、遂にヴィオレッタを歌ったことが、も何も怖がらなくていいのだ、と思える助けになったかもしれない、と語るデセイ。今回の「椿姫」は彼女にとって、キャリアというだけでなく、人生そのものにおいて岐路になったという。そんなデセイ渾身のヴィオレッタに、もう直ぐ日本で会える。

### 「愛」と「孤独」に焦点をあてたペリの演出 石戸谷結子 (音楽ジャーナリスト)

「この《椿姫》は、ローラン・ベリがわたしのために創りあげてくれた舞台。彼は本当に才能のある演出家です」とデセイは言う。初めて彼女がベリと共演したのは、オッフェンバックの「天国と地獄」。ジュビター役を演じるご主人のローラン・ナウリが囃子に化身し、デセイ扮するユリディスとユーモラスで濃密なラヴシーンを繰り広げる大評判になった舞台(DVDあり)だ。この演出で、デセイはベリに「恋してしまった」という。

いまやフランス最高の演出家として、ひっぱりだこのベリは、ラモーの「ブラター」やオッフェンバックの「美しきエレヌ」、大野和土指揮するグランドボーン音楽

祭での「ヘンゼルとグレーテル」(いずれもDVDあり)など大ヒットを飛ばしてきた。パリ・オペラ座で見た「愛の妙薬」も抱腹絶倒の舞台で、オペラ座は爆笑の渦に包まれた。

ベリの舞台は、「あっと驚く」奇想天外な設定が特徴だ。といっても単に時代を移したり意味なく設定を変えるのではなく、納得できるコンセプトがしっかりある。ただ新しさだけを狙った舞台では決してなく、必ず音楽に対する敬意があり、どこにどこに優しさや人間愛やユーモアが散りばめられている。

今回の《椿姫》の演出の特徴は、「ヴィオレッタの孤独」に焦点が当てられている。「高級」とはいえ、売れっ子の娼婦であるヴィオレッタは、快楽の館で夜毎パーティーに興じている。そこに自分に以前から想いを寄せているという純粋な青年が現れて



製作チーム。前列右端がベリ

愛を囁く。「これが真実の恋かしら?」と一度は胸をときめかしてみたヴィオレッタだが、「所詮は娼婦にすぎない」という現実につきあたる。このヴェルディが選んだ台本に忠実に従ったのが、ベリの演出である。これまでもオペラに包み、幻想的に描いてきたヴィオレッタの実像をさらけ出した演出といえるだろう。

2幕では、アルフレードの父からその現実をもう一度突きつけられ、娼婦だった過去に絶望するヴィオレッタ。テンボが早く、スピーディーに舞台が転換する今回の舞台での見どころは、デセイの女優のような演技力。全身で歌い、演じ、3幕では最後にヴィオレッタは壮絶な孤独死を迎える。

スベクタクルな舞台が多いベリにしては珍しく、悲劇に徹したドラマチックな舞台。この《椿姫》は、血の出るように鮮烈で、これまで誰も見たことがないほど、切なく感動的なヴィオレッタ像が描かれているのだ!

### 現代の歌姫(ディーヴァ)ナタリーが魅せるクラシックなオペラ!

オペラの歌姫というと「昔の女優」のような女性を想像しがちでは?しかしナタリー・デセイは、まさにクールでグラマス。憧れはポップスターという世代が見ても、「あれがオペラ歌手ならなってみたい!」存在がもしれない。



©田中克佳

満を持した《椿姫》を初めて歌うためにナタリーが選んだのは、この数年を過ごしてサンタ・フェ、ネイティブ・アメリカンの村が点在し、多くのアーティストが集う町には、実は美しいオペラハウスがある。「初めて来た時には何も無い所と想像したけれど、何故か心が安らぐのに気づき、魅了されてしまった。」もしかしら彼女が「最大のチャレンジ」というこの役のために、土地のパワーをも味方につけたかったのかもしれない。

ナタリーは常にシンプルで率直である。サンタ・フェ・オペラと《椿姫》を共同制作したトリノ王立歌劇場の総裁も初演に駆けつけ、「ナタリーにはYesかNoだけ、中間がない。」と笑う。そんな彼女がYesの決断をした《椿姫》は、盟友ベリによる演出。オーソドックスでありながら、このコンビならではの試みが観る者の胸を、より鋭く突いてくる。「グレン・ガルボ主演の椿姫の古い映画(原題:Camille)を繰り返し観てイメージを作ったわ。あと、ベリの演出はデュマの小説により忠実な形なの!」惜しげもなく役作り初期の種明かしをしてくれる一方で、「ベリは私のためにこの演出を作ってくれたのよ」と言い切る様子には、すでに自分だけの椿姫を作り上げた自信が漲る。「舞台では歌うだけでなくアクティヴに演技し、動き回る方が好き」という彼女ならではの、群衆の頭上によじ登る演出もある。落ちない秘訣は、「トレーニングよ。4週間!」きっぱり答える表情はまるでアスリート。だからこそ超絶技巧を駆使しながら、息も乱さずあらゆる演技をこなすことができる。極限まで鍛錬された身体と女優の魅力で、ナタリーはオペラというクラシックな舞台上、息を呑むほどの歌唱と格好良さを持ち込んでいる!



### ナタリー・デセイ 宮廷歌手の称号授与!!

4/21のウィーン国立歌劇場での「夢遊病の女」の公演直後に、ホルンダー総裁、オーストリア劇場連盟総裁シュプリングー氏、フランス大使や全出演者に祝福されつつ ナタリー・デセイに宮廷歌手の称号が授与された。女性で外国人であるデセイが、この称号を授与されるということは 歴史的にも奇跡的な出来事である。



# ラ・ボエーム

プッチーニ 全4幕  
Giacomo Puccini LA BOHÈME

ミミ:バルバラ・フリットリ  
ロドルフォ:マルセロ・アルバレス  
ムゼッタ:森 麻季



「至高のミミ」フリットリと  
「理想のロドルフォ」アルバレス  
現代最高の組み合わせに涙するしかない!

香原斗志 (オペラ評論家)

フリットリのミミが聴けるなんて、あきらめていた分、よるこびもひとしおである。数年前、初来日したフリットリにインタビューした際、彼女は「ミミはもう歌わない」と断言し、最高のミミ歌いを失ってしまった、と落胆したのを思い出す。ミミを歌うのにふさわしい声を持っているのに、なんでももったいないことかと。

フリットリのことを、私は「史上最強のソプラノ」と書いたことがある。圧倒的な美声と、音幅ひとつつつを緻密に再現できる稀有なテクニック、涙が出るほど美しいピアニッシモ——。歴史をひもとけば数々の名ソプラノの名は連ねられるけれど、フリットリにはそのうえ、現代の音楽家らしいアーティキュレーションへのこだわりと知的な構築力もある。こうした両立がたい条件を重ね持っているのだから「史上最強」と呼んでも大袈裟ではなからう、と。初来日より前から、彼女が歌うとあれば仕事をやりくりしてヨーロッパに“追っかけて”行ったものだ。いま、プッチーニやヴェルディのオペラをそれらしく歌える歌手が世界中で手薄になっている。イタリア・オペラだから、本当はイタリアらしい響きで聴くのが一番だが、天下のミラノ・スカラ座でさえアメリカやロシアの歌手頼みで、大味な歌



を聴かされることが多い。一方、イタリアの歌手たちからは、巨大なオーケストラを突き抜けて声を響かせる力が失われている。そんな中、ひとり絶対的な存在感を保っているフリットリ。彼女が日本でミミを、それもいざはレパートリーから外したミミを歌ってくれているなんて、夢のようだとおぼろげに言おう。フリットリの声には可憐さ、薄幸のお針子に似つかわしい声の陰り……、生粋のミミになるのにふさわしい条件ばかりが揃っているのだから。

ところで、歌手不足がソプラノ以上に深刻なのはテノールである。プッチーニの主役を歌って劇場を十分な声で満たすことができる歌手は、本当に少ない。軽めの声のテノールなら逸材も現われているけれど、ロドルフォを歌って物足りないと感じさせないテノールは、数えるほどしかない。しかも、聴き手はこの役には、青春ドラマのイケメン俳優のイメージと重なるような輝かしく色彩のある声を求めてしまう。ハイCも決められなければならない。それに答えられるテノールの最右翼は誰かと問われれば、アルバレスに止めを刺すだろう。

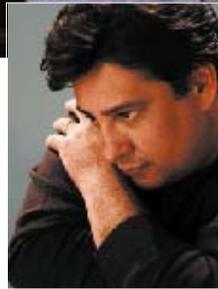
90年代の後半、まだ無名だったアルバレスがマントヴァ侯爵を歌うのを偶然聴き、その声が強くと残ったのは、やはり輝



©Ramella & Giannessi (c) Fondazione Teatro Regio di Torino



2006年公演より



マルセロ・アルバレス (ロドルフォ)

森 麻季 (ムゼッタ)



歌にも行まいにも「華」がある  
森 麻季は生粋のムゼッタ

あれは2006年、サントリーホールで上演された「ラ・ボエーム」だった。第2幕でムゼッタが客席通路から現われた瞬間、ホール全体が華やいたのが忘れられない。ムゼッタに扮していたのは森麻季である。華

きと色彩感が際立っていたからだ。キャリアの初めに軽めのレパートリー中心に歌っていたころから声量は圧倒的で、当たり前のようにヴェルディやプッチーニのヒーローとして、世界中の一流歌劇場が最も頼りにするテノールに成長した。

フリットリとアルバレス。ミミとロドルフォとしてこのうえない組み合わせだが、どちらかといえばフリットリは知が優り、アルバレスは感性が優るといっても、ふたりの身長

やいた点はふたつあって、ひとつは彼女の存在感。そこにいるだけで周囲がパッと明るくなるような日本人歌手は、ほかに思い当たらない。もうひとつは華やかな声。生来の声が明るく華麗なのだが、ヘンデルをはじめとするバロック作品も得意としている森麻季は、装飾歌唱にも長けている。平たく言えば、いわゆるコロラトゥーラが正確に回り、フレーズに華麗な彩りを加えることができるのである。

ムゼッタという役に要求されるもの、絶対に欠けてはいけないものは、まさに色気を含んだ華やかさだ。それは舞台上の佇まいや仕草にも、声のものにも、そして駆使するテクニックにも求められる。それらをひととおり兼ね備えている森麻季だから、フリットリとアルバレスという世界最強ともいえるコンビと伍して負けない、国際的な存在感を示してくれるにちがいない。

## トリノのオケと合唱の質の高さに注目!

林田直樹 (音楽ジャーナリスト)

いま、歌劇場の真の個性を決める要素があるとすれば、それは実はオーケストラと合唱団ではないか。公演の成否を決めるのは確かに主役歌手だが、彼らはみんな国際的であり、専属ではないからだ。だがオケと合唱だけは、当地だけのもの。オペラをケーキに例えるならば、彼らは目に見えないがその味を決定づけるスポンジ部分のような役割を果たす。私がトリノに期待しているのが、実は、まさにこのスポンジ部分。

合唱指揮者は、長年ミラノ・スカラ座でムーティ政権時代に辣腕をふるっていたあのロベルト・ガッピアーニ。先日東京・



音楽監督・指揮  
ジャンアンドレア・ノセダ



合唱指揮  
ロベルト・ガッピアーニ

春・音楽祭での「バレルジナル」/カルミナ・ブрана」でも来日し、その卓越した指導能力に称賛が集まった。ガッピアーニの真髄は、イタリア音楽の真の父であるバレストリーナから20世紀のペリオリゲティまでの数百年にわたるレパートリー

を持ち、多様な音楽様式に通じているという、経験の豊かさや学識の深さである。私はガッピアーニの合唱指導を見学して、その微妙な音程のコントロール、リズムの生命力の有無まで、作曲家の真意を洞察した者ならではの確信をもって、見事なまでに精緻に仕上げている手腕に感嘆させられた。彼のガッピアーニが手塩にかけて育て上げているのがいまのトリノの合唱団なのである。

音楽監督・指揮者のジャンアンドレア・ノセダについても興味深い話がある。先日私はストロボリタ・オペラを取材してきた際、そこで客演指揮者として常連となっているノセダの噂を耳にしたのである。ある団員は、私がノセダの名前を出したとたんに表情をパッと輝かせて、興奮した面持ちでこう言ったのである。「ノセダ

ですか? いや素晴らしい! うちのオケは全員ノセダが大好きなんです。実に音楽的で、誠実で、心がある指揮者じゃないですか!」。日本ではノセダは必ずしも人気スター指揮者とは言い難いかもしれない、どちらかというと玄人筋の好むタイプだろう。が、こんなにもニューヨークではノセダは愛されているのである。

森麻季もトリノのオケについて、こんな意味のことを語っていた——とにかく音楽を、そしてオペラを良く知っている人たちが、歌手がいる以前に、もうオペラとして彼らの音楽は成立している。一人ひとりが音楽家として素晴らしい。だから心ひそかに今回はあのオケと共演できることを楽しみにしている——。

トリノ王立歌劇場のオケと合唱は、どうやら相当強力なのではないか。オペラの

音楽全体に高いクオリティを求めるとあって、トリノは大いに期待できそうである。



### トリノ王立歌劇場 2010年日本公演【イタリア語上演/日本語字幕付】

ヴェルディ 椿姫	プッチーニ ラ・ボエーム
7/23 (金) 18:30開演	7/25 (日) 15:00開演
7/26 (月) 18:30開演	7/28 (水) 18:30開演
7/29 (木) 18:30開演	7/31 (土) 15:00開演
8/1 (日) 15:00開演	
キャスト: ヴィオレッタ: ナタリー・デセイ アルフレード: マッシュ・ポレンザーニ ジェルモン: ローラン・ナウリ	キャスト: ミミ: バルバラ・フリットリ ロドルフォ: マルセロ・アルバレス ムゼッタ: 森 麻季 マルチェロ: ガブリエレ・ヴィグヴァーニ ジョナル: ナターレ・デ・カローリス

**全公演**  
 SW38,000 AW34,000 BW28,000 CW24,000 DW18,000  
 EW13,000 FW9,000 (税込)  
 ●伊丹劇場会員 SW58,000 AW55,000 BW28,000 CW23,000  
 DW18,000 EV3,000 FW9,000

●2席目セット券 SW74,000 AW64,000 BW54,000  
 ●夢倶楽部会員 SW72,000 AW62,000 BW52,000  
 公演日によっては残券数少の場合がございます。

●学生席 (各ランクの半額/限定) 発売中  
 (社会人学生を除く。公演当日にて5歳までの学生が対象です。当日は入り口にて学生証を提示いただきます。学生証がない場合、一般価格との差額を前払することになります。)

●この公演の情報は2010年5月10日現在の予定です。病欠、怪我、その他の事情で変更になる場合がございます。最終的な出演者は毎日公表させていただきます。一旦お求めいただいたチケットは、公演中止の場合を除きキャンセル・公演日の振替等をお受けいたしませんので、あらかじめご了承ください。ご承諾をいただけない場合は、当日券をご利用下さい。  
 (前売りで完り切れとなった場合は当日券の販売はございません。)

7/31, 8/1の  
残券はA席のみ

【次のことをあらかじめご承知の上、チケットをお求め下さいませ】  
 ①開演時間には遅れますと、長時間ご入場をお待ちいただくこととなります。時間には余裕を持ってお越し下さい。 ②ご入場には1人1枚チケットが必要です。また未就学児の入場はご遠慮下さい。 ③本公演は全席指定です。指定のお席にご案内下さい。  
 ④場内の写真撮影・録音・録音・携帯電話等の使用は、固くお断りいたします。 ⑤本公演の字幕は舞台の裏面に掲出されます。一部の席で見えない場合がございますが、あらかじめご了承ください。 ⑥ネットオークションなどによるチケットの転売は、トラブルの原因になりますのでお断りいたします。

主催:朝日新聞社/TBS/TOKYO FM/ジャパン・アーツ/神奈川県民ホール(横浜公演のみ) 後援:イタリア大使館/イタリア文化会館

●チケットのお申込み  
**ジャパン・アーツ** ぴあ  
 (03)5237-7711  
 www.japanarts.co.jp/

twitter @japan\_arts

ジャパン・アーツ 携帯サイト  
 http://jacu.co.jp

チケットぴあ pia.jp/t  
 0570-02-9999  
 東京文化会館チケットサービス (03)5685-0650  
 イープラス eplus.jp  
 神奈川芸術協会 045-453-5080 (横浜公演のみ)  
 県民ホールチケットセンター  
 045-662-8866 (横浜公演のみ)